

大隈重信の文明運動と人生一二五歳説

真 辺 将 之

近年、政治家に関する評伝が数多く発表され、近代日本の政治史研究は、人物研究という側面から活況を呈している感がある。しかしながら、大隈重信に関しては、国会議事堂に伊藤博文・板垣退助とならんでその銅像が建てられているほどの憲政史上の重要人物でありながら、これまで必ずしも研究が盛んであるとはいえない状況にある。記述に誤りの多いといわれる『大隈侯八十五年史』^{〔1〕}が、いまだもつとも詳細な伝記として使用されている状況にあること^{〔1〕}が、研究の進展状況を象徴していると言つて良いであろう。

もちろん、明治一四年政変以前の時期については、渡辺幾治郎氏による政局史的な研究^{〔2〕}や、中村尚美氏による大隈財政に関する研究^{〔3〕}など、古くからの蓄積が存在するし、第二次大隈内閣期に関しても、関連する論文は多数発表されている。しかしこの両者の中間に位置する時期、すなわち立憲改進黨結党以後一九〇七年に大隈が政党を離れるに至るまでの大隈の政党指導のあり方や、一九〇七年以後第二次内閣の組閣に至る時期の「文明運動」については、いまだ研究が進んでおらず、課題の多く残されている部分であるといつてよい。

近年、五百旗頭薫氏の研究⁽⁴⁾や、木下恵太氏の諸論文⁽⁵⁾など、この時期の大隈の政党指導を扱う研究もいくつか出てきている。とはいえ、それらの研究は大隈個人というよりも大隈系政党全般を扱ったもので、かつ財政・経済政策論に比重が置かれている。また、従来の大隈研究の多くは政治史または経済史的視野からする研究がほとんどである。しかし、後述するように、大隈の「民衆政治家」としてのイメージの形成過程や、大隈が一九〇七年に一旦政界引退を余儀なくされながらも一九一四年に第二次大隈内閣を組織する背景となった民衆人気の源泉がどこにあるのかということを考える上では、早稲田大学と大隈重信との関係や、日露戦後より活発化していった彼の「文明運動」と「人生一二五歳説」をはじめとする文化的活動を検討することが不可欠であろうと考える。

以上の観点から、本稿では、大隈の「文明運動」とよばれる活動と、「人生一二五歳説」を取り上げてみたい。もとより、大隈の文明運動は、極めて幅広い分野にわたって行われたもので、到底本稿のみでそのすべてを深く検討することは不可能である。本稿では、まずはこの大隈の「文明運動」と「人生一二五歳説」を俯瞰することによって、大隈研究におけるその重要性を再認識するきっかけとし、今後の大隈研究、とりわけ、文化史的視座からする研究の端緒としたいと考える。

一 「民衆政治家」としての大隈重信

大隈に関する一般的イメージとしては、何よりもまず「政治家」としてのイメージが強いであろう。それも単なる政治家ではなく、立憲改進黨を結成し、日本で最初の政党内閣である第一次大隈内閣を組織し、そしてその後大正期に入って第二次内閣を組織した、政党政治家としてのイメージが強いに違いない。大隈自身、「政治は我輩の生命で

ある^⑥というよく知られた言葉を残しているように、日本に議会政治・政党政治を根付かせようということを生涯考へ続けていたことは間違いない。そして、大正時代に誕生した第二次大隈内閣は、そうした大隈を後押しする民衆の声援があつて、非常に人気の高い内閣であつたこともよく知られている。また死去にあたっては、何十万単位の国民が参列した有名な「国民葬」が挙行されたことも著名であろう。こうしたところから、大隈には「民衆政治家」あるいは「平民政治家」としてのイメージが強く付されている。

ところが、このような大隈の庶民的なイメージや、国民的な人気というものは、実は大隈が政党に関わつた当初から存在していたわけではない。実は、大隈は一九〇七（明治四〇）年に、一度、政界引退を余儀なくされている。すなわち、立憲改進黨の後身である憲政本党の党首を辞任しているのである。この時、表向きは、大隈が七〇歳となり、老齡になつたため引退するのだとされ、大隈の伝記の類にもそのように書いてあるものも散見されるが、実際にはそのような自発的な引退ではなく、むしろ不本意な結果なのであつた。大隈は、憲政本党内において藩閥との接近と軍拡容認・積極主義路線への旗幟変更を図る改革派によつて、引退へと追い込まれたのである。先に引いた「政治は我輩の生命である」という発言も実はこの憲政本党総理辞任の演説において発言されたものであつた。つまり、自らが不本意ながら政界に追い込まれたことに對し、大隈は「諸君が我が輩を党から退けようとも無論我が輩の活動する天地は日本到る処にあるのである、決して止めないのである」^⑧と明言して、自分は生涯政治に関与することを決してやめないという強い意志を、抗議の意味を込めて説いたのであつた。

もしこの時、大隈に後年のような国民的な人気というものがあれば、その力を背景に、選挙で勝利して、その議席数を後楯として政権に近づくことも可能であつたはずで、このような不本意な形で党首の座を追われることもなかつたにちがいない。すなわち、この時点での大隈には、第二次内閣期ほどの圧倒的な人気はなかつたのである。一八九

○年の議会開設から、一九〇七年の引退までの一七年間、大隈が率いていた政党が総選挙で第一党の座を勝ち得たのは、自由党と合同して憲政党を組織していた時期を除いては、ただの一度も無い。民衆からの圧倒的支持を背景に、党内の反大隈勢力を押さえつけることができるような状況ではなかったのである。もちろん、政治家としては、「四大政治家」あるいは「三元老」^⑨「明治第二の三傑」^⑩というような見方もあり、政治家としての存在感はその時点でも大きかったことは間違いない、ある程度の人気があったことも事実ではあるが、しかし、大正期に見られたような圧倒的な全国民的人気はまだこの時点の大隈には無く、だからこそ政界引退を余儀なくされたのであった。

ところが、このような形で引退を余儀なくされた大隈が、一九一四（大正三）年、ふとした成り行きから再び首相の地位に立つことになる。この前年の一九一三年、いわゆる第一次護憲運動によつて長州出身の桂太郎の内閣が倒れ、さらに次の薩摩出身の山本権兵衛の内閣もまた、シーメンス事件がきっかけとなり退陣することになったことで、大隈に出番が回ってくるのである。薩長出身の首相が相次いで国民の指弾を受けながら辞任したという経緯により、国民の政治不信はそれまでにない高まりを見せていた。そのようななか、または薩長藩閥出身の人々が政権を担うことになれば、国民の不満はいっそう高まり、収拾のつかないことになりかねない。そこで、国民の人気のある大隈なら、この難局を乗り切れるのではないかと、ということで、大隈が次の首相に推薦されることになるのである。

そして実際、この時の大隈の人気は凄まじいものであった。首相就任後、一九一四年二月に議會を解散した大隈は、翌年三月の選挙戦において、それまで衆議院に圧倒的な勢力を占めてきた立憲政友会から八〇議席近くの議席を奪い取つて政友会を第一党の座から蹴落とし、与党の立憲同志会と大隈伯後援会とで、三八一議席のうち約三分の一にあたる二四一議席を占めるほどの圧勝を収めるのである。^⑪しかも、この時の立憲政友会を仕切っていたのは、辣腕で知られる原敬である。その原ですら全く歯が立たないほど、大隈の国民からの人気は高かったのである。

一九〇七年には、政党の党首の地位を追われたほどの大隈が、大正期には確固たる国民的人気者となっていたということを考えると、この間に大隈に人気をもたらす何かがあった、と考えるのが自然であろう。ではこの間、大隈が行っていたのは何なのか、といえば、本稿の表題に掲げた「文明運動」と「人生一二五歳説」なのである。

二 「文明運動」の提唱と国民教育

「文明運動」とは、文明運動というのは、大隈が行っていたもろもろの文化的活動を総称したものである。大隈は、驚くほど多くの文化的活動に関わっていたが、それらの文化的活動は、「東西文明の調和」という理念に基づいて行われていたということから、「文明運動」と一般に呼ばれている。ただしこの運動は必ずしも一九〇七年の政界引退を機に始まったわけではない。明確に何時から、と線を引くことは難しいが、日露戦争における日本の勝利が一つのきっかけであったことは間違いない。日露開戦後、大隈は『開国五十年史』の編纂に着手するなど、こうした活動を活発化させていく。

もちろん、もし一九〇七年の政界引退がなかったならば、あくまでその文明運動は政治活動の余暇に行われるに過ぎないものであり、「文明運動」として総称されるほどのものとなつたかは疑問である。政界を引退した大隈は、『国民読本』や「大日本文明協会叢書」シリーズの刊行など、さまざまな書籍の出版活動や学会協会の活動に積極的にかかわるようになる。大隈は「東西文明の調和」の旗印の下、優に百を超える学協会のトップに就任、資金的援助や、その人材ネットワークによる組織運営に寄与し、それら学協会での講演活動を積極的にに行いながら、国民の知識向上を目指して活動していくのである。

奇しくも、この一九〇七年初頭に、大隈は「東西文明の調和」の理念を高唱しはじめた。すなわち、『教育時論』に掲載された「日本の文明」において、「開国以来の我日本国は、東西両系統の文明が触接の境地となつて、世界に於ける一切の文明の要素が、雑然として一所に集合したからして、我が国の思想、制度、文物は大混乱、大衝突、大競争を生じたのであつたが、可驚、世界の識者が全く調和の途無しと断念した、この東西両文明は、開国以来僅かに五十年間で、充分なる調和を得たのである、即ち真正の意味に於いて、世界的文明は、我国にて始めて成立したのである⁽¹³⁾」としたうえで、「我日本国に於て、東西両文明が触接し、日本国民の大能力によりて、之が調和統一を得たるは前述のとおりであるが、それは唯大体根本に就いて云つたまで、あつて、之を人性多種の方面に發達せしめて、内に於ては政治、學術、産業、文學、美術となし、更らに又この真文明を以て、外世界の各民族に宣伝し、之を教化誘導するは、実に我日本民族の天職である⁽¹⁴⁾」と呼びかけるのである。さらに同年四月二日には、清国人が組織していた中国基督教青年会において、初めて「東西文明の調和」を論題に掲げて演説を行うなど、本格的にこの理念の鼓吹につとめていくようになるのである。そして、先に引いた「日本の文明」において「開国以来の我日本国」が引き合いにだされているように、この理念の形成にあたっては、『開国五十年史』の編纂事業において、開国以後の日本の發展の過程を再検証していたことが、大きく影響していたことは間違いない。

かねてより編纂を続けていた『開国五十年史』は、一九〇七年の一二月に上巻が刊行され、翌年二月に下巻が刊行されることになる。『開国五十年史』は、前述したように、大隈の「文明運動」の開始を示す一つの指標となる著作である。開国以来五〇年の日本の發展を、その当事者に語らせたところに最大の特徴がある。上巻冒頭に大隈による総論「開国五十年史論」が掲げられ、ついで本書の目玉といふべき、徳川慶喜による幕末回想談「徳川慶喜公回顧録」が続く。幕末政治の形勢を、他ならぬ最後の將軍・徳川慶喜に語らせたことは圧巻であり、当時としても非常に驚き

をもつて迎えられたことであつた。徳川慶喜は、大隈の依頼を再三にわたつて断つたとのことであるが、大隈は諦めずに何度も依頼を重ね、ようやく承諾を受けることができたとのことである。⁽¹⁵⁾ さらに伊藤博文による「帝国憲法制定の由来」、松方正義による「帝国財政」、山県有朋による「陸軍史」、山本権兵衛による「海軍史」、浮田和民稿で大隈と板垣退助が校閲した「政党史」、渋沢栄一による「銀行誌」「会社誌」、後藤新平による「台湾誌」など、一流の当事者による担当項目が目白押しの内容となつている。また取り扱われているテーマとしても、政治・経済・軍事のみならず風俗や衛生、監獄、都市にまで及ぶきわめて幅広い目配りがなされておられ、とりわけ安部磯雄による「社会主義小史」の項目まで立てられているのは、大隈の視野がいかに広く、かつ思想的寛容さを含むものであつたかを示しているよう。

そして同書の末尾には大隈による「開国五十年史結論」が掲げられており、日本の国是は「開国進取」にこそあり、鎖国時代は例外的状況に過ぎなかつたとした上で、開国以来五〇年の日本の発展は、そうした「開国進取」の国是のもと、西洋の新文明を導入し応用することによつて成し遂げられたものであると述べる。そして、単にそうした日本の発展を手放して褒め称えるのではなく、いまだ日本国民に欠けている諸要素として、健全なる権利意識が発達していないこと、教育が中央集権的であり、学問が西洋の受け売りで独自の発想を生みだすに至っていないこと、また経済的側面では、産業組織が未だ幼稚であり実業道徳も発達しておらず、軍事や政治の発達に比して遜色があること、また風俗習慣の上でもいまだ改良の余地があることなどを挙げ、「従来我国の発達は一に外交によりて、泰西の文明に接触したる結果なれば、我国民が今後更に一段の進歩を企図し、其理想を実現せんとするに当り、愈々忘るべからざるものは、将来益々外交を盛んにして、世界の平和的競走場裏に立ち、愈々泰西の文明に接触して其善所、長所を採り、以て向上の一路に勇往邁進すべき⁽¹⁶⁾」だと論じる。その上で大隈は、日本はさらにそこから進んで、単に西

洋文明を導入するだけではなく、西洋文明を広く東洋に紹介し、かつ「東西両洋の文明を融和綜合して、一層世界の文明を向上せしむること」⁽¹⁷⁾が必要であり、それこそが日本の今後の使命なのであると論じて、本書を結んでいる。

以上のように、「東西文明の調和」という、文明運動の中心的理念そのものが、この『開国五十年史』を編集し日本の発展の過程を跡付ける作業のなかから導き出された結論なのであった。この「結論」が発表されたのは、一九〇八年二月刊行の下巻においてであるが、一九〇七年冒頭には、既に『開国五十年史』の編纂は大詰めを迎えており、そのなかで、過去から未来へと、大隈の視線は進んでいき、一九〇七年からの「東西文明の調和」の理念の提唱につながったのである。

大隈は、これ以降、「東西文明の調和」の理念を、著書や講演などを通じて一般に折に触れて示していった。一九〇九年九月には『開国五十年史』の漢訳版および英訳版を刊行、翌一九一〇年には『国民読本』を刊行する。『国民読本』は、義務教育を終えたレベルの青年男女に向けて刊行されたもので、「大日本の国体と国民性とを闡明し、現時の法治国に於ける国家組織の綱領と、国民の責任とを概説し、また忠君愛国の新意義を指示し、兼ねて日本国民の理想を顕明せり」⁽¹⁸⁾とされるもので、日本の国体・国民性から、立憲政体の仕組みや行政・法律・経済などの諸部門にわたった公民教育を企図したものであった。さらに一九一三年には、初学者に向けて、『国民読本』よりも文章を平易にした『国民小読本』を刊行している。

『国民読本』『国民小読本』の刊行からもわかるように、大隈の文明運動における一つの方向性は、こうした国民教育の側面において発揮された。一九〇七年に大隈は、かねてよりその経営にかかわっていた早稲田大学の総長に正式に就任するとともに、早稲田大学や各種教育関係団体主催の巡回講演を積極的に行った。こうした巡回講演活動に關しては『大隈侯八十五年史』第二巻に詳述されている。また、大学に通うことのできない階層の人々を対象とする通

信教育にも熱意を入れ、一九一〇年、国民教育講習会を組織して集中講義を開催⁽¹⁹⁾、さらに翌年通信教育講義録として『国民教育青年講習録』を発行する⁽²⁰⁾。また一九一五年からは、実業之日本社から発行された『実業講習録』の総裁を務めた。一九一六年には大日本青年修養団を組織して、全国の青年団組織の統括を図り、『大日本青年講習録』を発行して、これら青年団を基軸に通信教育活動を展開しようとした⁽²¹⁾。

大隈は、前述した「政治は我輩の生命」と述べた政界引退の際の演説において、「どうせ無邪気の国民は政治上の思想は乏しいものであるどうしても指導者が之を教育し指導して立憲的国民を拵へなければ真の立憲政治は行はれないのである⁽²²⁾」と国民の政治的意識の欠如を批判的に述べていた。そして「我輩は政党の失敗者で、爾来は、専ら国民教育に向つて力を用ゐたが、其意は、即ち、今日の政党は用を為さぬ。是れは、国民に、政治的知識、政治的徳徳が欠乏して居るからで、教へざるの民を以て憲政を行はんとするも不可能であると信じたに在る⁽²³⁾」というように、政党政治が上手く機能しないのは、他ならぬ国民の政治的知識・政治的徳徳の欠乏に基づくものであるとし、そこから大隈は国民教育に力を注いだのであった。そしてこうした国民教育においては、「東西文明の調和」のような理念が説かれる一方で、憲政に関する知識の向上や政治教育の必要性、政治的徳徳の必要性などについてもたびたび説かれることになる。

三 各種学会・協会への支援活動

以上のような国民教育が大隈の文明運動の一方の柱であったとすれば、もう一方の柱は、様々な学会や協会の活動に対する援助であった。大隈は各種の学会・協会の役員に就任し、さらに資金的援助を行うことによって、日本の文

明の進展と、「東西文明の調和」の理念の実現を目指したのであった。大隈が関わった学会・協会の数は、いったいいくつにのぼるのか今日では数えることが不可能なほどに、多数にのぼる。ここでは、そのうちのいくつが主要なものについてのみ概観したい。

これら学会・協会への関与も、『開国五十年史』同様、日露戦争の前後から始まっている。たとえば、一九〇四年に会長に就任した同仁会がそうである。同仁会は一九〇二年六月に、長岡護美を会長として設立された会で、医学を通じて中国をはじめとするアジア諸国に援助の手を差し伸べようという趣旨の団体である。大隈は一九〇四年八月、長岡の後を承けて会長に就任したが、大隈が会長に就任してのち、俄然活動が活発化し、一九〇六年以降、朝鮮と中国東北地方に順次病院を開設、また早稲田大学の構内に東京同仁医薬学校を設立し、中国人医療関係者の育成に力を注いだ。その後も昭和期に至るまで、活発な活動を展開している。同会については、会活動に関する概略的研究は存在するものの⁽²⁴⁾、大隈に即して、彼がいかなる理念のもと同会の活動に参加したのか、また彼の中国認識と同仁会の活動がどのような関係にあるのかなどは未解明のままであり、今後明らかにされるべき問題であるといえる。

一九〇五年には『日本百科大辞典』編纂総裁を勤めている。三省堂から刊行された日本で初めての本格的な大百科辞典と言われるもので、当初あまりに計画が壮大であったこともあり、三省堂はこのために一九一二年に一旦倒産してしまうことになる。しかし大隈は、この事業を完結させるために、政財界に働きかけ、何とか三省堂の経営再建をなしとげ、一九一九年、全一〇巻の完結にまでこぎつけることになる。この百科辞典の観光が日本の出版文化の向上に果たした役割は非常に大きかったといわれる。⁽²⁵⁾

また同じ一九〇五年、大隈は国書刊行会の創立に際して総裁に就任した。同会は、近世以前の日本の優れた書物を復刻刊行して、日本の文化的伝統を見直すこと趣旨に発足した団体であった。『続々群書類従』全一六冊を皮切りに、

『新群書類従』（全二〇冊）『新井白石全集』『燕石十種』『近世風俗見聞集』（徳川時代）商業叢書』『丹鶴叢書』『文明源流叢書』『鼠璞十種』『百家隨筆』などをはじめとする多数の良書を刊行し、近世文化研究に資するところ大であった。この国書刊行会についても、『大隈侯八十五年史』に若干の記述があるのみで、本格的な検討はされていないのが現状である。

その一方、一九〇八年四月、早稲田大学関係者を中心に設立された大日本文明協会の会長に就任した。設立宣言には、「国民知識の向上進歩に資し、以て東西文明の調和融合を計らんとするもの也」と謳われ、⁽²⁶⁾「東西文明の調和」の旗印のもと、幅広く国民に対する啓蒙活動を行っていくことを旨とした。特に特筆すべきは、「大日本文明協会叢書」シリーズである。前述の国書刊行会が近世以前の日本の書物の出版に力を入れたのに対し、この叢書は、西洋のさまざまな最先端の書物を翻訳し、日本に紹介することに力を入れた。一九〇八年一〇月に、大隈による序論・結論を付した大冊『欧米人の日本観』三冊を出版したのを皮切りに、大隈の生前だけで一九五巻もの翻訳書を出版した。その後も、叢書名を改めながら、昭和初期まで合計三二五冊もの書物を出版、佐藤能丸氏はこれを「大正デモクラシー」期における最大の出版事業」と評している。⁽²⁷⁾ また単に冊数が多いだけではなく、西洋で発行されてまだ数年しか経っていないような書物が多く翻訳されており、しかもその中に、後に歴史に残る名著とされるようになったものが多い。たとえばリップマン『輿論』などは、今でも政治学の古典として不動の位置を占めている書物であるが、アメリカで原本が刊行されたわずか一年後に翻訳・刊行されている。当時、欧米の名著は、原本が刊行されて一〇年以上経過し、海外で評価が固まってからようやく翻訳されるということが当たり前であったなかで、このような速さと優れた選択眼は驚くべきものであると評されている。⁽²⁸⁾ このほか、文明協会では、活発な講演会活動を行い、大隈もまたその演壇に立った。さらに各種雑誌を発行して文化の啓蒙につとめ、大正から昭和初期にかけての文化の発展に大きく寄与し

た。

こうした学術的な立場からの活動とは少々異なる面白いところでは、一九〇九年七月に煙花はなび競技会の会長に就任している。⁽²⁹⁾大隈は大の花火好きとして知られており、事あるごとに花火を打ち上げたと言われる。大隈が南極探検後援会の会長として、白瀬中尉による南極探検を物心両面から後援したことはよく知られているが、この南極探検隊の出発に際しての壮行会に際しても、大花火大会を開催、全国の有名花火師に手紙を送って参加を依頼し、すばらしい花火大会が行われたことが知られている。⁽³⁰⁾

また一九一〇年一二月には、日本で最初の自動車のオーナーズクラブである日本自動車倶楽部の会長に就任している。大隈は一九〇六年末に、それまで馬車を使っていたのを廃止し、オチキス号という自動車を自家用車として使用しはじめていた。大隈は、「馬車は危険で、厄介で、不経済で役に立たぬ」⁽³¹⁾「乗用としては固より今日の処では之れに上越すものはない、其の乗心地の善い事と言つたらない、一度び之れに乗ると、復た他の乗物には乗りたくない。更に其の時間の節約に至つては、流石に文明の利器で、何人も金さへあれば、之を利用すべきであるが、惜しいのは其価が不廉なので、貧乏の日本では尚ほ未だ大に利用せらるるに至らない、何事も去来となると金の問題であるが、之が爲めに何時も日本が西洋諸国に後れを取ると云ふのは誠に残念の至りだ」⁽³²⁾と述べており、価格が高価であるために自動車になかなか日本に普及しないことを歎き、日本自動車倶楽部を拠点に自動車の利便性をし、自動車の普及につとめたのであった。ちなみに、当時自動車がいかに高額であったかを示すと、巡査の初任給が一二円であった時代に、大隈の購入した自動車の値段が七五〇〇円であった⁽³⁴⁾という事実からわかるであろう。すなわち、巡査の給料の約六二五ヶ月分ということになる。

なお、大隈は自動車だけでなく、飛行機の普及にも一役買っている。一九一四年に、帝国飛行協会の会長に就任し

ているのである。この会は現在でも日本航空協会という名前で存続・活動しているが、その初代会長が大隈であった。時恰も第一次世界大戦の開戦の年であり、飛行機の技術が軍用に転用され、戦争のあり方を多く変えることとなった。戦闘機の発達により、多数の爆撃が行われ、一般の非戦闘民が戦争に巻き込まれることも多くなるため、飛行機の発展は人類のためにならないのではないか、という議論が登場しつつあった時代であった。そのようななか、この帝国飛行協会は、民間航空の発展のために啓蒙・普及活動を行おうとする趣旨で設立された団体であった。飛行機によって、一時的には戦争の被害が甚大になるかもしれないが、その結果人々は必ずや戦争をやめようという気持ちになっていくであろう、そうなれば、飛行機が、民間の交通機関として、平和に利用されていくようになるに違いない、と予見⁽³⁵⁾し、大隈は、「飛行機は、平和に対する大きな脅威のやうに感ぜらるるけれども、これを応用するの極は、戦争に終に不可能ならしむるのである。吾輩が一方に於て、飛行協会のためにつくし、一方に於て、平和協会の会頭を兼ねる所以は、実に茲にあるのである」と論じて、民間における飛行機の普及に尽力したのであった。なお大隈は、周知のとおり、明治初期に、伊藤博文とともに鉄道敷設に主導的な役割を果たしており、鉄道、自動車、飛行機という、現代の主要な交通機関すべての普及に、一役買っているということができるのである。

大隈が飛行機の民間利用・平和利用を説いたことは今述べたとおりであるが、そもそも「東西文明の調和」という理念も、「調和」の語にあらわれているように、異文化の相互理解と、世界平和の達成という理念と結びついているものであった。大隈は一九一〇年に、大日本平和協会の会長に就任しているが、この団体は世界的団体である万国平和協会の日本支部という位置づけにあった団体であり、大隈はこの団体の会長としてしばしば講演を行い、平和の必要性を強調していた。

ところが、大隈は同時に、一九〇九年、帝国軍人後援会の会長にも就任している。このことを捉えて、当時から大

限のことを二枚舌だと批判する者がいたようである。しかし大隈は場当たりに両者の会長を引き受けたのではなく、両者の相補性を明確に意識した上で両会の会長を引き受けていた。そもそも大隈にとつて、軍隊とは、領土拡張のための道具ではなく、平和のための止むを得ざる必要悪と捉えられていた。

国際間の道徳は、個人間の道徳ほどには未だ進歩しない。個人の不完全なる道徳よりも尚一層不完全である。今個人間の道徳が進歩したと云ふものゝ、国に警察制度がなければ秩序は忽ち破れてしまふであらう。斯ふ云ふ訳でありますから、警察なしに国際間の争議を決する——即ち仲裁裁判に依つて総べての争ひを決着すると云ふ時代は、早晚来るには相違ないであらうが、仲々急には来ぬだらうと思ふのであります。果して然りとせば国防即ち軍備の必要なることは、決して古への戦国時代に譲らない。国の体面と国の威厳とを保つには、何としても軍備が必要である。「中略」これらの事から考へて見ますと、兎も角も国際間に兵器を執つて、最後の判決をなすが如き不幸から避けよう、争議が起れば何とでもして、平和に其局を結ばうと云ふことに為つて、如何なる国と雖も漫りに戦を好み、或は侵略的の方針を取つて、羅馬帝国の其れを夢想すると云ふことは最早無いであらうと思ふ。⁽³⁷⁾

したがつて、軍人後援会会長として軍人に対して講演する際には、「戦争は敵国を滅ぼすかも知らんが、また自国をも滅ぼすことゝなるのであります、此故に軍国主義の教育ばかりでは、決して真正の強兵を期することは出来ませぬ。」⁽³⁸⁾「国防の根本は、国民の剛毅なる精神と困難に堪へる堅忍なる力とにあらねばならぬ。平和の下に此力を以て、各々職分に従ひ事業を営めば、則ち国を富ますのである」⁽³⁹⁾として、あくまで平和のための軍隊であることを強調したのであつた。そして実際、この軍人後援会の活動は、軍国主義的気風の鼓吹というような種類のものではなく、むしろ徴兵制度によつて困難に陥つた人々を救助するための組織であつた。「境遇の変化で働き手を失ひたる為めとか、若くは止むを得ざる不幸に陥りたるが為、生活難を訴へる如き者に対しては、国民がどうかして之を救助すると云

ふ事は、社会の務めであり、亦国家に対する義務であると思ふのです⁽⁴⁰⁾ というように、傷痍軍人や軍人遺族の家庭を社会の力で救助しようというところにその主旨が存在していた。なお、この帝国軍人後援会と大日本平和協会に関しては、これまで研究があまり存在しない。帝国軍人後援会に関しては、『社団法人帝国軍人後援会史』⁽⁴¹⁾ がその活動の概要を記しており、また大日本平和会については『近代日本「平和運動」資料集成』⁽⁴²⁾ が近年出版され、機関誌が復刻されたが、いずれも歴史家による本格的な研究は存在せず、特に大隈研究の立場からは、大隈の両会での活動の実態や、そこで唱えられた平和論・軍備論がいかなるものであるのか、また「東西文明の調和」の理念とどう関係し、他の文化運動や、政治家としての大隈の外政論とどのように関連しているのかが検討される必要があるだろう。

以上述べたように、帝国軍人後援会は弱者救済という側面を有する団体であったが、他にも大隈は弱者の救済に関する活動を数多く行っている。例えば、大隈は精神病患者に深い同情を寄せ、精神病科談話会などの会合で精神病院にて度々演説を行い⁽⁴³⁾、一九〇五年には夫人綾子を精神病患者慈善救済会の初代会長に推薦するなど⁽⁴⁴⁾、精神病患者の治療や待遇の向上に尽力した。また犯罪を犯して懲役刑を受けていた人々が社会に復帰するための出獄人保護事業にも手厚い援助を行っていた⁽⁴⁵⁾。東北の農村が不作で飢饉にあえいでいた際には、早稲田大学の学生が設立した東北凶作地救済会という団体を援助して自ら会長となり、東京でチャリティーの音楽会を開催するなどの活動を行っている⁽⁴⁶⁾。ただし、こうした弱者保護事業は、文明運動の本格化する以前から行われており、文明運動とは区別して考えるべき活動であるかもしれない。しかしそうであるが故に、大隈自身の弱者に対する目線がかなり早い段階から培われていたことの証明ともなるものである。

このほか、大隈は日本とインドとの交流を促進する日印協会の会長や、日本とアメリカの友好関係を目的とする日星協会の名誉総裁、また日本とスイスとの友好関係を目的とする日瑞協会の会長など、国際関係においても大きな役

割を果たした。なお、これらの学会における大隈の活動の実態と、そこでの主張についても、これまでほとんど検討がなされておらず、今後の課題といふべきであろう。

これに関連していまひとつ述べておくべきは、大隈と外国人との個人的交流の広さである。大隈家には毎日多くの客が詰めかけたことは良く知られているが、そのなかには外国人も多かった。大隈自身が一度も外遊をしたことがないにも関わらず、外国人が毎日のように大隈邸を訪れたというのは不思議であるが、口コミのような形で、大隈という人物の噂が海外に広まっていたようである。日露戦争時にロンドンで外債募集に奔走したイギリス通の高橋是清は「英国などでは知識階級で大隈侯を知らない人は恥とした位」であり「侯が外国の賓客に尽された事も一通りや二通りではない、だから外客で侯に招かれなるとか、其庭園を見ないとか言ふことは恥と思つてゐた。之がどの位外人に誇りを与へ又好意となつたか知れない、従つて日本のために非常に利益となつてゐる」と述べ⁽⁴⁷⁾、大隈がいかに外国人にその名を知られ、大隈の外国人との交際が日本の外交に良きように働いたかということを強調している。外国人がひっきりなしに邸宅を訪れる様子は「彼の早稲田邸は宛然たる私設外務省、私設国際倶楽部⁽⁴⁸⁾」と評された。塩沢昌貞によれば、大隈は「支那人、印度人、土耳其人など東洋に属する人々に向つては欧米に於ける文化の長所を挙げて、これ等を取り入れて自国の文化を進めることの必要を細かに説かれたものである。(中略)欧米の訪問者に対しては、日本を始めとして東洋古来の文化に就いていろいろ話をされるのが常であつた。(中略)東西両洋人の間に相互の理解を持ち来たすことが、世界平和に必要であるといふ考へからである」というが、このように、外国人と東西の文明を論じ、自らの「東西文明の調和」の理念を披瀝したのであつた。

そして、その結果、大隈の議論は、海外の新聞紙などにおいて折に触れて紹介されることになるが、ここではその一例として、イギリスの労働党が一九一八年に発表した新政策提言書「Labour and New Social Order」を挙げておき

たい。この提言書は、冒頭“The End of a Civilization”として、ヨーロッパ文明の行き詰まりを説くところから議論が始められているのであるが、まずその一段落目を引いてみよう。

We need to beware of patchwork. The view of the Labour Party is that what has to be reconstructed after the war is not this or that Government Department, or this or that piece of social machinery ; but, so far as Britain is concerned, society itself. The individual worker, or for that matter the individual statesman, immersed in daily routine — like the individual soldier in a battle — easily fails to understand the magnitude and far-reaching importance of what is taking place around him. How does it fit together as a whole? How does it look from a distance? Count Okuma, one of the oldest most experienced, and ablest of the statesmen of Japan, watching the present conflict from the other side of the globe, declares it to be nothing less than the death of European civilisation. Just as in the past the civilisations of Babylon, Egypt, Greece, Carthage and the great Roman Empire have been successively destroyed, so, in the judgment of this detached observer, the civilization of all Europe is even now receiving its death-blow. We of the Labour Party can so far agree in this estimate as to recognise, in the present world catastrophe, if not the death, in Europe, of civilization itself, at any rate the culmination and collapse of a distinctive industrial civilization, which the workers will not seek to reconstruct. At such times of crisis it is easier to slip into ruin than to progress into higher forms of organisation. That is the problem as it presents itself to the Labour Party to-day.

53

このように、この新政策提言書は、ヨーロッパ文明の行き詰まりを指摘した大隈の発言を紹介するところからはじまり、我々はこうしたヨーロッパの問題点を直視して奮起しなくてはならない、として、新しい政策提言を行うという順序になっているのである。果たして、近代日本の政治家で、海外の主要政党の政策提言の冒頭にその持説が引用

された人物が、大隈のほかにいるのであろうか。この一事をもってしても、大隈の議論の影響力を見るに余りあるといつてよいだろう。

四 「人生一二五歳説」の提唱

以上紹介してきた大隈の「文明運動」は、どちらかと言うと、ある程度の知識や教養のある階層に向けて行われたものであったと言つてよいであろう。それに対し、大隈の「人生一二五歳説」は、学問とは無縁な庶民層にまで広く受けいられることになる。

この「人生一二五歳説」は、その名の通り、人間は本来一二五歳まで生きられるのであり、人間五〇年などという小さいことを言わずに、遠大な理想のもと、前向きに生きていこう、という趣旨の持論であった。こうした持論を大隈がいつから抱き始めたかは明確にはわからないものの、明治三〇年代の後半には既にこうした主張を行つたことが確認できる。⁽⁵⁰⁾ 大隈は一八八九年、外相として交渉を進めていた条約改正に際して、反対派によつて爆弾を投げつけられ、右脚を切断する重傷を負つていたが、そのことが健康や寿命について考えるきっかけになつたと言われる。⁽⁵¹⁾ またその後、大隈の少年時代からの友人である歴史家久米邦武が、新聞紙上にアメリカ人の人生一二五歳説が載つていたのを教え、それが大隈に影響を与えたとも言われる。⁽⁵²⁾ いずれにせよ明治三〇年代後半には、大隈は人生一二五歳説を提唱し、しだいに世間に広まっていくことになる。そして折に触れて主張していたこの一二五歳説は、一九一五年に『人壽百歳以上』⁽⁵³⁾としてまとめられ刊行される。

今日でこそ、人生一二五歳説と言つても、とてつもないことには聞こえない。しかし、大隈が一二五歳説を唱えた

当時はそうではない。当時の平均寿命は四二〜四四歳程度であり、それからすれば一二五歳というのはとてつもない数字であった。もちろん、この平均寿命の算出にあたっては、子供時代に亡くなる人が多いという当時の状況が反映されているので、ある程度の年齢に達すれば実際にはもう少し長く生きる人が多かったのであるが、それでも、五〇歳六〇歳になったら、仕事をやめて隠居し、人生の店じまいの準備をするという時代である。大隈の一二五歳説は、大風呂敷と取られかねないほどの寿命の議論をもとに、老人がともすれば退嬰的になりがちな状況を批判し、人間は活力を持って前を向いて頑張るからこそ長生きもでき、社会にも貢献できるのであると論じ、明るく前を向くことを主張した議論なのであった。

人生一二五歳説の根拠は、地球上の生物はだいたい成長期の五倍の寿命を持っており、人間は二五歳くらいまでは成長を続けるから、その五倍の一二五歳が人間の寿命であろうという推論に基づくものであった。これは実際にヨーロッパのある医学者が唱えていた説のようである。しかし、大隈は一応これを論拠としつつも、自ら多少論拠が薄弱とも述べてもいて、実際には、こうした学術的な根拠よりも、自らの直感、特に一二〇歳ぐらいまでの高齢者が実際に世界各地に散見されることから導きだされたもののようでもある。⁽⁵⁴⁾

大隈の一二五歳説に特徴的なのは、健康と長寿の原動力として、当時盛んに言われていた身体の鍛錬とか衛生とかいうことよりも、精神的な要素を重視していることにある。特に中国最古の医書と言われる『素問』の「精神内に守らば疾何れより来たらん〔引用者註―原文は「精神内守病安從來」⁽⁵⁵⁾―という考えに影響を受け、心のコントロールこそが健康にとって大きな影響力があるとの持論を持っていた。明治以後、日本は西洋医学を導入、伝染病予防の観点などから衛生について喧しく言われていた時代であるが、大隈は、「余り用心深くなると身体は薄弱となり、害物に抵抗する力が無くなる」⁽⁵⁶⁾として、それよりも心を元気にすること、前向きであることこそが、身体に良いのであると

いう主張を繰り返した。ストレスの身体に対する悪影響や、過剰衛生による抵抗力の欠如といった今日の医学にもつながるような考え方を、どれだけ科学的根拠があったかは疑わしいものの、おそらくは経験と直観に拠って、主張していたのである。

そしてこのような精神的要素の重視は、「希望は人を長寿にする〔中略〕、無限に楽みを将来に持つて居るから、それに導かれて寿命も引き延ばされる。太く短い流儀はいかぬ。我輩はせかず、あせらず、徐々行くのである」⁽⁵⁷⁾というように、常に心を楽ししく、前向きに持つていくようにコントロールせよという主張につながった。特に大隈は、怒ったり、愚痴を言ったり、あるいは欲望が強すぎたりというのはよくないと主張していた。

憤怒、愚痴、貪欲等は長寿に大禁物である。長生せんと欲する者は常に気楽な考へを有することが大切である。気楽な考へさへ有れば心は何時も平和で、物に触れて怒つたり、悲しんだり、愚痴を云つたりする事は無い。其れから物事は程と云ふことが大切である、絶対に酒を飲むなどは云はぬ。(中略)又食物の如きは何でも善い。(中略)少々不消化物でも胃を素通りなりとして通過するものである。然し体力不相応な大食は宜しくない。其れから夜更し朝寝なども禁物で、之れも程と云ふことを忘れないやうにす可きである。⁽⁵⁸⁾

このように、「程」というものを大事にして、心を平穩に元氣に前向きに生きようというのであった。実際に大隈自身、「憤怒、愚痴、貪欲等」を避けるよう心掛けており、大隈はほとんど怒ることのない人物として知られていた。大隈は、怒りを鎮める方法について、「吾輩も怒る時がないではないけれども、それを静める所の一家の治療法があるんだ。吾輩は何か癩に障ることがあると先づ好きな風呂へ這入るんだ。勿論、当世の人のやうに、石鹸は用ひないで、昔風に大袋へ糠を入れて、それで、ごしごし身体を摩擦するのさ。左様すると、癩癩が自然に柔いでくるから妙だ」と述べ、さらに大抵はこれで静まるが、それでも静まらない時は、酒を一杯だけ飲む。それから、酒でも駄目な

ら寝る、というように述べている。⁽⁵⁹⁾

また大隈が「人生一二五歳説」において強調していたのは、決して自分を年寄りだと言わない、ということであった。

今一つ長寿に禁物とする処は、決して年寄つたと云はないことである。能く年寄が「年に対して恥しい」など称して、若い者と一緒に遊ぶのを遠慮するが、之れは実に愚な話である我輩の如きは将来ばかり勘定して、百二十五歳以上生きて始めて長命と心得、其以下ならば不幸短命として居る。さすれば七八十の人間も未だ先きが六七十年も活動することが出来るから、老衰せずして何時までも若くて居られる。然るに世には若い年寄りが沢山に居る。之れは自分から遠慮して年寄りになるのである。其処で陰気な老人だと云つて家族の者からも嫌われる。すると腹立たしくなつたり悲しくなつたりするが、其れが為めに早く死んで仕舞ふやうになるから、精神は常に愉快に若々しく持たなければならぬ。斯くせば不老長生疑ひ無しである。⁽⁶⁰⁾

大隈は、「年齢は百歳、百二十歳に成らうとも、其の元氣、氣力、思想等は元より、体力に於ても若い者に少しも劣らず、彼らと打ち混じて愉快に盛んに、世の中の為めに活動出来るやうに成らしめ度⁽⁶¹⁾」と、常に若い気持ちで、若者とともに活動することを説いた。六〇歳七〇歳程度で何が老人だ、まだ人生は半分にも達してない、まだ七〇年以上残っているんだぞ、そう考えたら、これからまだ一仕事でも二仕事でも出来るだろう、もつと働いてもつと社会に尽くし、そしてもつと人生を楽しめと、そういう風は大隈は主張したのであった。そして大隈自身、「我輩は〔中略〕心持はまだ二十歳前後の青年だ、そこで読書もやる、年寄大嫌い、元老大嫌い、皆時代違ひの輩と見て居る、そこで書生好き、青年好き、過去を語らぬ⁽⁶²⁾」と、しばしば自ら七〇代・八〇代の「青年」を自称した。大隈はしばしば青年論を語り、また青年の会合に出席して演説し、そして青年たちによって組織された団体に援助の手を差し伸べた。

そして、右に引いた文章のなかで、「年寄大嫌い、元老大嫌い」と、元老が引き出されているように、自ら「青年」

を自称し、「青年」を援助することは、元老への対抗という政治的意味をも帯びていた。日露戦後、反政友会・反藩閥的傾向を有する青年層が政治的に活性化してくるが、大隈はこうした青年層を取り込み、元老と対抗する自らの政治的リソースとしようとしたのであろうと考えられる。特に自ら設立した早稲田大学出身の学生からは後にメディアや政界に多数の人材が輩出されていくことになるが、大学においても総長として青年論を語りかけたことは、後に大隈シンパを生み出すにあたって大きな役割を果たした。そして元老をその対比として持ち出すことは、自らを元老に對抗する者⇨民衆の側に立つ政治家であるとアピールすることにつながった。

この人生一二五歳説は、大隈がどこまで意図的にそうしていたかは別として、健康と長寿を望む民衆の心情に合致し、庶民層への大隈人気を醸成していき、その人気を背景に、大隈は再び政治の世界に復帰することになる。現代よりもはるかに国民が貧しく、病苦も多い時代に、来世を説く宗教ではなく、あくまで現実を立脚点にして、人々に生きていく希望を与えた大隈の存在は非常に大きかった。評論家の横山健堂は「世人が、伯大隈の出慮に関して、多く、「年寄の冷水」の感を為さざるものは、彼がかねて意気の盈満して、一二五歳説を唱道せるに由らずんばならず。彼が新首相たるの人気の一半は、其の一二五歳の説に存するなり」と評している。第二次大隈内閣の誕生時、大隈は数え七十七歳であった。

五 「文明運動」の影響力と大隈の人格的魅力

以上のような「文明運動」と「人生一二五歳説」は、書物や新聞に現れただけではなく、既に述べたように、精神的な講演活動によって全国に広められていった。こうした講演活動は、明治前期の大隈には見られないものであった。

すなわち、初期議会以前において、大隈とならぶ政党指導者であった板垣退助が全国各地で精力的に演説活動を行っていたのに対し、大隈重信はほとんどそうした遊説活動を行っていない。例えば一八八二年四月一六日の改進黨創立式でも、大隈は式辞を述べるのみで、改進黨の主張については一切を語らなかった⁽⁶⁵⁾。しかもこの時の大隈の挨拶の様子について横山健堂は「態度、太だ揚がらず。今日より見れば、全く、別人の如し〔中略〕彼が、弁論を事とするに至りし動機は、之を彼より聞かざれども、事實は、日清戦役の後に在り⁽⁶⁶⁾」と証言している。はたして日清戦争が動機であったかどうかは検証を要するけれども、改進黨が「民党」としての姿勢を明確化する一八九〇年代以降、大隈は少しずつ民衆の前で演説を行うようになっていき、さらに政界引退によって民衆に語りかける機会が飛躍的に多くなるのである。

そしてそうした民衆に語りかける場をこなすことによって、大隈はしだいに講演の名手として知られるようになる。もともと、大隈は外交の場における英国公使パークスとの論戦で頭角を現したという経緯もあり、弁論は得意であった。しかし、他方で、前述した横山健堂の叙述からも明らかのように、多数数の前での演説・講演というものは、大隈にとって得意なものではなかったのである。それが、多くの場数をこなすことによって、次第にその弁舌力を演説・講演に活かすことができるようになり、「伯の談論は、恰も美目の如く、古酒の如く、終に人を酔はしめずんばあらざる也」⁽⁶⁷⁾「恰も図書館の精霊が、マーチの曲につれて、伯の舌頭より踊り出づるかの感を人に与ふ」と評されるほどに成長を遂げたのであった。そしてさらに、それを支えたのは、一報における大隈の耳学問と、他方における読書の力が存在していた。実際大隈は読書家として知られ、知識豊富さには、当時の早稲田大学の学者ですら驚くほどであった。しかも大隈は講演に際して、原稿を手持って朗読するということをしなかったという。つまりその場で自分の頭で考えて自分の言葉で話すことができたということである。

ただし、大隈人気は、そのような弁論の内容だけに基づくものなのではないことには注意しなければならない。例えば、大隈の「人生一二五歳説」に関しては、次のような逸話も残っている。

吾輩が山陰道を旅行した時、某所に古来、長寿を保つた歴史上の人物の名と年齒とが列挙して、貼り出されて居た。それを見ると、武内宿禰、三浦大輔などが載つて居た。新しいところでは、吾輩の名も掲げてあつた。年はと見ると一二五歳となつて居て〔中略〕まあ大関格と云つた具合だ。ところが、其処で、吾輩が演説すると、其地方のものは番付によつて吾輩が、既に一二五歳に達したと信じてしまつた。大隈さんは若いなあと云つた。それには吾輩も思はず噴き出した。さて吾輩の演説がすむと、長寿にあやかりたいと云ふので、我輩が演壇に飲み残して置いたコップの水を群集が争つて、飲まうとするのを見て、吾輩も大に驚いたことがあつた。⁽⁶⁸⁾

人々は必ずしも、大隈の一二五歳説を正確に理解した上で大隈を支持していた訳ではなかつた。このことは後述するように、実は非常に重要な問題である。そしてそれは単に「人生一二五歳説」のみ当てはまる問題ではない。前節で述べたように、大隈は自ら青年を自称し、青年と交わることを好み、青年に援助の手を差し伸べることを惜しまなかつたが、しかし、青年の側がそれでは文明運動の内容を理解した上で、それを支持したのかといえ、そうとばかりは言えない側面も存在するのである。そのことを証するために、二人の青年が大隈との交流に際して、どのような感慨を抱いたのかについて、やや長くなるが、史料を引用してみたい。最初に早稲田出身のジャーナリスト馬場恒吾が、在学中に、政治雑誌を出そうということで大隈に面会に行ったところから始まる回想である。

僕は早速大隈さんに面会を申し込んだところ会つてやるというので、二、三人の仲間と会いに行つた。随分無茶な話で、大隈さんに叱られるかも知れんと思つたが、何しろ若い二十四、五の時分だ。大隈さんの応接間は誰でも客を通すというので、僕が行つたときにも成瀬仁蔵といつて日本女子大の創立者であつた人や、それから紳士らしい人が二、三人いた。そこで話を

しようと思うが、大隈さんは紳士連中とはかり話をして僕らの方に向かない。でひよっとこちらをむいたときに、僕は口を切つて「政治を年寄に委せていたら碌なことはないから、僕ら青年が政治をとるんだ」といったら、「それでどうするか」というから、「雑誌を出します」、「用件は」と聞くから、「用件は百七十五円貸して下さい」という。「そうか」といったまま、成瀬（仁蔵）さんとか、いろいろな紳士に向つて、世界の情勢がどうかと政治の話をしている。そんな話を聞きたくない。金を出してくれるのか、くれんのかそれを聞きたいのだが、大隈さんは談論風発だから少しも言葉を挟む間がない。黙つて聞いていてちよつと話が途切れると、「伯爵」、「話は考えておく」それからまた世界の情勢だ。「考えておく」というのだから、考えておくだろうと思つてそれじゃまた、と僕らは引退つた。

三、四日して僕は幹事の田中唯一郎さんから、「君はけしからん、大隈伯のところへ行つて金をねだつたんじゃないか」と聞かれた。「ねだつたんじゃない、雑誌の保証金を貸してもらいたいと言つただけだ」と答えると、「まあともかく貸すそうだから、明日の朝行け」というのである。これはしめたと思つて、翌日二、三人の学生と一緒に行き、応接間に通された。客は誰も来ていなかった。大隈さんが杖をついてこつこつ出てくるのを見ると、片手に金を持っていて僕に渡した。そして「それを落とすじゃ駄目だぞ」といった。僕は天下の志士のつもりで行つたが、大隈さんから見ると子供だったのである。「落しはしません」といつて、もう一べん金を入れた帯をおさえて、「ありがとうございました」と礼を言つて歸つてきた。

〔中略〕そのとき一月の印刷代が何部かで三十五円かかった。その金が出ない。僕らのときには郷里からおふくろが折角送つてきた着物を袖も通さないですぐ質屋へ持つていくのは平氣だった。そういうことをしても印刷代が払えない。そこで今はないが、錦輝館という大きな場所で演説会を開き、大隈さんに出てもらった。その時分演説会は無料だったが、僕らは五銭取つた。それで五十円の金が入る。それをやったところが田中幹事にまた叱られた。「君たちは大隈伯をつれてきて、演説会を開いて金をもうけるんだ」、「いや金をもうけるのではない、印刷代を払うんだから悪いことはない」というようなことを言つたものである。

それから青年会などをつくつて学生時代は大分活動したのだが、親父が事業に失敗したため、僕は一年半ばかりで早稲田を

よして新聞記者になった。新聞記者を十年もやっている誰でも生意気になり、人を喰った気になる。「中略」ちようど大隈侯が園遊会を開いたので久しぶりに出かけて行つた。庭園へ天幕を張つて、千人くらい集まっているところへ、大隈さんがテールブルの真中に立つて演説をした。始めはいわゆる天下国家を論じたが、それはどういうことをいつたかよく覚えていない。終る頃になつて、大隈さんが声を落していわく、「諸君！早稲田を出た人ばかりが、こういう風に多数集つて嬉しい。嬉しいが、諸君に一ついつて聞かすことがある。諸君は節を曲げてはいかんが、曲げる危険があるときに曲げなくてすむ秘訣を伝授しよう」というのである。これはつまりこうだ。例えば百円月給をとつているものが百円なければ暮されぬという習慣をつけると、自分の意見を曲げてでも百円の月給をとつておきたいと思う。ふだんから心がけて百円とついても四十円、三十円でも暮らして見せるという決心になつておれ、それが一番よい方法だというのである。僕はそれを聞いて、大隈さんはわれわれが相当の紳士になつても、やはり子供のようになつて可愛いんだなと思つたのである。

大隈さんの顔を知っているものはだんだん少なくなつてきたが、大隈さんという人は強い人に向かつては恐れず、弱い人間に対しても高ぶらず、天上天下皆同じように可愛いがつてくれた。それが本当の民主主義者だと思ふ。僕は、大隈さんに世話になつたし（その借りた百七十五円は後に返したが）、今でも尊敬している。⁽⁶⁹⁾

以上からわかることは、大隈の世界情勢論・天下国家論などの談話に、馬場が一切興味を示していないということである。にもかかわらず馬場は、大隈の人格に対しては強い尊敬の念を抱き、一人の強力な大隈シンパになつてゐるのである。

次に、東京帝国大学在学中に、大隈と関わりをもつた鶴見祐輔の回想を引いてみよう。

『や、よく来た、そこへ座れ』

さう言つて、大隈侯——その時分は大隈伯であつた——は、大きい安楽椅子の上から、自分たちに、手で合図された。

自分は、紺の盲縞の袴、を無造作に穿いて、今から思ふと——垢だらけの緋木綿の綿人に、同じ羽織、一高式に腰に鼠色の

手拭をぶら下げていた。「中略」一高の弁論部の委員であつたので、その翌月の弁論部大会に、大隈侯の演説を頼まう、といふので、かうして打揃つてやつてきたのである。「中略」

『抑々政治といふものは、ぢや』

と老侯は、大きな声で話しつゞけられた。それは、この部屋には、先程から、一人の中年の洋服の紳士が、椅子に腰を下ろして、対談して居たのである。何んでも早稲田派の代議士であつた。「中略」老侯は、段々こつちを向いて、話し出した。代議士はあれども、無きがごとく、といふよりは、この人を低級な政治家の標本として、自分たちを戒しめる、といつた風の話しつぶりであつた。なんでも、政界の革新は青年の力である、といつたやうなことであつた。当時の多数の青年が考へてゐたやうに、自分たちは、衆議院議員といふものに対して、一種の輕侮の感を抱いてゐた。今から言へば、大それたことであるが、自分たちは、その代議士を、大そう気の毒な人のやうな感じをもつて見てゐた。従て老侯の政界革新論は、あまり深い感慨を、自分には与えなかつた。兎に角、その日は一高の演説だけ承知して貰つて、晩春のお庭を拝見して歸つた。

〔中略〕ワイル博士をつれて、自分はある春の日の午後、隈侯をまた早稲田邸に訪れた。その時は全く驚いた。「中略」老侯は、ワイル君を捕まへて、米國政治史の講義を始めた。

『抑々、米國建國の事情は、ぢや』

さう言ひつゝ、侯は度々手を高くさしあげて、大きなヂェスチュアーをしたりなどした。「中略」大きい額、殆ど毛のない丸く高い頭、光沢のよい顔、高い顴骨、秀でた鼻、日本人には珍しく大きい口、厚い唇、さうして、間断なく笑つてゐるやうな、愛嬌のある眼。ともすると、満顔に崩れる笑ひ。その一切が、開放的な、朗らかなその人の性格を、如実に現してゐた。

ワイル君は、自分の方から質問を出す余地もない程、米國史の講義を聞かされて、何んとも仕様がなないので、

『成程、成程』

とこつて、おしまひには

『それは新しいお話を伺ひました』

などと言った。

いつまで経つても話が尽きないので、次の約束を気にしながら、ワイル君が無理に立ち上がった。それでも、老侯はまだ話をやめなかつた。自分を捕まへて、もつと米國史の講義をしたいらしかつた。

通訳の関係上、自分が一番屢々会つたのは、山県公であつた。大隈侯には、身近くお眼に掛かつたのは、この二度だけであつた。しかし、公会の席で遠くから見たのは、隈侯が一番多かつた。

自分は性格上、一番隈侯に牽かれた。

その剛毅な、男性的な、開放的な、そして、一種のユーモアに富んだ老侯の資質は、日本政治史中の逸品であると思ふ。最後の大隈内閣の首相としての老侯には、自分は感服しなかつた。建設的政治家としての侯は、伊公や山公に較べては、事績の跡が及ばないやうに思ふ。それにも関はず、大隈侯の姿は、随分長い間、日本国民の脳裏に残るであらうと思ふ。また外国人のうちに落とされた、その大きい投影は、仲々消えないであらう。それは、大隈侯は、英国のチェムバーレンや、米国のローズヴェルトと同じく、その事業よりも、その思想よりも、そのパーソナリティによつて残る人だからである。「中略」隈侯は首相たらず、政党の首領たらずとも、大きい影を日本国民に投じて死なれたに違ひない。それは、隈侯は、山公よりも、伊公よりも、おもしろい人であつたのである。珍しい人間であつたのである。「中略」ゆゑに、首相を罷めてから、隈侯は大きく光つていつた。日本国民史上の第一の大浪人として、彼は輝いてゐた。その晩年は、秋の日が、地平線上に落ちてゆくやうに、死に近づくと共に、次第に大きく光つていつた。ある偉大さを、我々はそのうちに看取した。⁽⁷⁰⁾

鶴見祐輔の場合もまた、演説内容やその主張よりも、大隈の人格に強く惹きつけられ、それによつて大隈びいきの立場になつてゐることがわかるであらう。すなわち、明るく、開放的で、ユーモラスな人格こそが、当時の人々を最も惹きつけた大隈の魅力であつた。限りなき理想を説く「東西文明の調和」論も、また明るく前を向くように説いた「人生一二五歳説」も、こうした人格と結びついて、初めて大きな意味を持つたのであるということには留意してお

く必要があるだろう。

おわりに

以上本稿では、大隈重信の「文明運動」と「人生一二五歳説」について概観するとともに、それが大隈の政界復帰に際しての国民的人気の醸成に大きな役割を果たしたことを論じるとともに、今後、それぞれの事業における大隈の活動のあり方をより詳細に明らかにしていく必要性があると述べた。ただし、特に最後に述べたように、大隈の所論の内容だけでなく、その人格的要素が、大隈人気を醸成するにあたって大きな役割を果たしたことは留意しておく必要がある。というのも大隈人気がそうした人格的要素に依拠していたとすれば、当然、大隈重信という個人が没し、大隈の人格を信奉する者たちがいなくなるにつれて、大隈に対する関心は次第に薄れ、研究の対象から外れていくことが予想されるからである。

例えば福沢諭吉を想起してみるとよい。福沢は、いうまでもなく早稲田と並び称される私学である慶応義塾の創設者であり、かつ同時代においては絶大な影響力を持っていた人物である。しかし、学者として『学問のすすめ』をはじめとするベストセラーを世に送り出し、その著述の内容によって人々を惹きつけていた福沢諭吉は、その没後においても、書籍は死なず、その書籍を通じて多くの人々の関心を惹きつけ続け、その結果、現在に至るまで、福沢研究は極めて盛んに行われ続けている。それに対し、本稿でも度々指摘したように、大隈に関してはいまだ手つかずの研究領域が多数存在するが、その背後には、没後も書物が生き続ける学者・福沢と、「その事業よりも、その思想よりも、そのパーソナリティによつて」人々を惹きつけていた大隈の違いが存在しているだろうと考えられるのである。

大隈の影響力が単に言論の内容にとどまらない、幅広い人格的要素をも含むものであったとすれば、当然研究する側にも、単に言論内容を分析するにとどまらない手法が求められる。とりわけ、政治家・教育者・文明運動家などのさまざまな顔をもつ大隈を論じる上では、そうした多面性に、さらに人格的要素を加味した立体的な分析が要求される。しかしながら、そうした立体的分析は一朝一夕になるものではない。まずは、個別の学会・協会や、特定の時期における大隈の活動や発言などを細かく分析していき、その弛みなき積み重ねの上に、初めて大隈の総合的な姿が見えてくるのであろう。その意味で、本稿は、今後の大隈研究に対する問題提起にとどまるものでしかない。今後、大隈研究が再び活気を取り戻していくことを願うとともに、筆者も微力ながら、少しずつ大隈の文明運動に取り掛かりたいと考えている。

註

- (1) 『大隈侯八十五年史』の編纂過程とその問題点については、真辺将之「『大隈侯八十五年史』編纂過程とその特質」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五七―四を参照。
またこれまでの大隈研究・評伝については、中村尚美「大隈研究の回顧と現況」(早稲田大学大学史編集所編『大隈重信とその時代』(早稲田大学出版部、一九八九年)、佐藤能丸「大隈重信研究の過去・現在・未来」(早稲田大学史記要』二七、一九九五年七月)、および五百旗頭薫「大隈重信」(御厨貞監修『歴代総理大臣伝記叢書』別巻、ゆまに書房、二〇〇七年)を参照。
- (2) 渡辺幾治郎「文書より観たる大隈重信侯」(早稲田大学出版部、一九三二年)、同「大隈重信」(時事通信社、一九五二年)など。
- (3) 中村尚美「大隈財政の研究」(校倉書房、一九六八年)。
- (4) 五百旗頭薫「大隈重信と政党政治」(東京大学出版会、二〇〇三年)。
- (5) 木下恵太「第十六・十七議会期における憲政本党」(『早稲田政治公法研究』五一、一九九六年四月)、同「民党連合」形成期における憲政本党」(『早稲田政治公法研究』五三・五六、一九九六年二月・一九九七年二月)、同「日露戦後の憲政本党と「旗幟変更」」(日本政治学会編『年報

- 政治学一九九八」、岩波書店、一九九八年)、同「第二次大隈内閣の財政構想―絶対的非募債」政策を中心に」(『早稲田大学史記要』三一、一九九九年七月)、同「政友会成立期における大隈重信と憲政本党」(『早稲田大学史記要』三五、二〇〇三年一〇月)、同「日露戦後における大隈重信と憲政本党」(『早稲田大学史記要』三六、二〇〇四年一月)。
- (6) 大隈重信「憲政本党に別を告ぐ」(大隈重信『高遠の理想』、早稲田大学出版部、一九一五年) 六八九頁。
- (7) 木下恵太「日露戦後の憲政本党と「旗幟変更」」、同「日露戦後における大隈重信と憲政本党」(『早稲田大学史記要』三六、二〇〇四年一月)。
- (8) 「憲政本党に別を告ぐ」六八九頁。
- (9) 八面玲瓏生「我邦現時の四大政治家」(『太陽』三十四、一八九七年二月)。なお大隈以外には伊藤博文、松方正義、板垣退助が含まれる。
- (10) 『青年界』二二三口絵、一九〇三年二月。
- (11) 黒頭巾「現代人物競べ(一)」(『読売新聞』一九〇七年九月五日)。
- (12) この時の選挙戦については、佐藤能丸「大隈伯後援会に関する一考察」(日本史攷究会編『日本史攷究』、文献出版、一九八一年)、および季武嘉也「第一二回総選挙と憲政会の誕生」(『大正期の政治構造』、吉川弘文館、一九九八年)。
- (13) 大隈重信「日本の文明」(『教育時論』七八二、一九〇七年一月) 五頁。
- (14) 大隈重信「日本の文明」七頁。
- (15) 『大隈侯八十五年史』二(大隈侯八十五年史編纂会、一九二六年) 六五一頁。
- (16) 副島八十六編『開国五十年史』下(開国五十年史発行所、一九〇八年) 一〇五七頁。
- (17) 『開国五十年史』下、一〇五七頁。
- (18) 大隈重信『国民読本』(丁未出版社・宝文館、一九一〇年) 一頁。
- (19) 大隈家編輯局編『国民教育東京講演』(丁未出版社、一九一一年)。
- (20) 「大隈伯の青年講習録」(『読売新聞』一九一二年四月二五日)。
- (21) 「大日本青年修養団の設立」(『早稲田学報』二五三、一九一六年三月)。
- (22) 「憲政本党に別を告ぐ」六九〇頁。
- (23) 大隈重信「党弊刷新の必要愈急也」(『大勢を達観せよ』、帝国講学会、一九二二年) 八六頁。
- (24) 大里浩秋「同仁会と「同仁」」(『人文学研究所報』三九、二〇〇六年三月)、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動―同仁会研究」(『日本医史学雑誌』四五―四六―四六一、一九九九年一月―二月―三〇〇〇年六月)。
- (25) 三省堂百年記念事業委員会編『三省堂の百年』(三省堂、一九八二年)。

- (26) 文明協会編『財団法人文明協会三十年誌』(一九三八年、文明協会) 九頁。
- (27) 佐藤能丸「大日本文明協会試論」(『近代日本と早稲田大学』、早稲田大学出版部、一九九一年)。
- (28) 内田満「『文明協会叢書』の世界」(『早稲田政治学史研究』、二〇〇七年、東信堂)
- (29) 「三面時事」(『読売新聞』一九〇九年七月二日)。
- (30) 「南極探検隊送別会」(『読売新聞』一九一〇年一月二七日)。
- (31) 「大隈伯の談」(『自動車』一一九、一九一三年九月) 五頁。
- (32) 「自動車と名士」(『グラフィック』自動車号、一九一一年三月) 五頁。
- (33) 「値段の明治大正昭和風俗史」上(朝日新聞社、一九一七年) 五七二頁。一九〇六年の数字。
- (34) 「大隈伯の自動車試乗」(『読売新聞』一九〇六年二月八日)。
- (35) 大隈重信『青年訓話』(丸山舎書籍部、一九一一年) 二二〜二三頁。
- (36) 市島謙吉『大隈侯一言一行』(早稲田大学出版部、一九二二年) 三四六頁。
- (37) 大隈重信『大隈伯演説集 高遠の理想』(早稲田大学出版部、一九一五年) 四九〇〜四九二頁。
- (38) 大隈重信『経世論』(富山房、一九二二年) 二四六頁。
- (39) 大隈重信『大隈伯演説集 高遠の理想』 四九八頁。
- (40) 大隈重信『経世論 続編』(富山房、一九一三年) 三五六頁。
- (41) 帝国軍人後援会編『社団法人帝国軍人後援会史』(帝国軍人後援会、一九四〇年)。
- (42) 『近代日本「平和運動」資料集成』全五巻付録一別冊一(不二出版、二〇〇五年)。
- (43) 岡田靖雄「大隈重信と日本の精神衛生運動」(『日本医史学雑誌』五四―一、二〇〇八年)。
- (44) 『日本の精神保険運動の歩み』(日本精神衛生会、二〇〇二年) 六三頁。
- (45) 「婦人出獄人保護所設置に就て」(『読売新聞』一九〇二年一月三日)。
- (46) 沢田和彦「プロニスワフ・ピウスツキの観た日本」(『スラウ研究』四三、一九九六年)。
- (47) 「諸名士の見たる大隈侯」(『実業之世界』一九一二年二月) 三頁。
- (48) 徳富蘇峰「代弁者を失へる日本」(『大観』五一―二、一九二二年二月) 九頁。
- (49) Labour Party (Great Britain) Executive Committee
Labour and the New Social Order; a Report on Reconstruction (London: Labour Party 1918) pp.3.
- (50) 「百歳の寿」(『万朝報』一九〇六年八月二四日)。
- (51) 横山健堂『伯大隈』(実業之日本社、一九一五年) 一六九頁。

- (52) 久米邦武「維新前の大隈伯」(同『時勢と英雄』、広文堂、一九一五年)。
- (53) 百歳会編『入寿百歳以上』(真人社、一九一五年)。
- (54) 『伯大隈』一六九頁には、大隈は一二五歳説を打ち立てるに際し、内閣統計局で世界各国の長寿者の統計を調査したとある。
- (55) 『入寿百歳以上』一六六頁。
- (56) 『入寿百歳以上』二九頁。
- (57) 『早稲田清話』(冬夏社、一九二二年)七頁。
- (58) 『入寿百歳以上』四五頁。
- (59) 市島謙吉『大隈侯一言一行』一四四～一四五頁。
- (60) 『入寿百歳以上』四六～四七頁。
- (61) 『入寿百歳以上』一八頁。
- (62) 大隈重信『早稲田清話』(冬夏社、一九二二年)一四五頁。
- (63) 有馬学『国際化』の中の帝国日本(中央公論者、一九九九年)五七頁。
- (64) 『伯大隈』一五七頁。
- (65) 指原安三編『明治政史』(『明治文化全集正史篇』下、日本評論社、一九二八年)四一五頁。
- (66) 『伯大隈』三五八～三五九頁。
- (67) 『伯大隈』一六六頁。
- (68) 『大隈侯一言一行』三三七～三三九頁。同様の談話は『入寿百歳以上』四一頁にもある。
- (69) 馬場恒吾『自伝点描』(中央公論社、一九八九年)三五

～三八頁。

(70) 鶴見祐輔『壇上紙上街上の人』(大日本雄弁会講談社、一九二六年)四八七～四九三頁。

〔付記〕

本稿は、二〇〇九年度佐賀市大隈祭での講演「大隈重信の文明運動と人生一二五歳説」の原稿に加筆・修正を加えて論文化したものである。また本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(課題番号二三七二〇三三〇)による研究成果の一部である。